



つながりを

生みだすもの・こと



伊集院 理子

幼稚園に入園してきて、多くの子どもたちは同年代の子どもと共に過ごす生活を初めて体験する。入園当初の子どもたちの様子は、十人十色である。遊具に引かれ、母親ともスムーズに別れ、どんどん遊び出す子どももいれば、母親と別れることに抵抗を示し、何日間も、事によれば一ヶ月近くも母親と一緒にいてもらいながら、どうにかこうにか幼稚園の環境に一人でいられるようになっていく子どももいる。保育者に対しても、早い段階で心を寄せて頼りにしてくれる子どももいれば、長い間心を開いてくれない子どももいる。友だちに対しても、それまでの体験からプラスのイメージを持って、積極的に関わろうとしていく子どももいれば、そばに他の子どもがいるだけで脅威で、不安定になって泣きわ



めいたりする子どももいる。

今年、三歳児クラスの担任になり、二十人の子どもたちと新たに出会い、十人十色の子どもたちのあり方を受け止めながら、「人と人がつながりあい、関わりあいながら育つ」状況はどのようにして生み出されていくのか、ということを考えながら、子どもたちと共に日々の生活を積み重ねてきている。いくつかの事例を通して、人と人がつながるといふことについて考えていきたい。

行為でつながる

入園当初A子は、母親と別れるのに抵抗を示したので、母親にも何日か一緒にいてもらった。少しそばにいてもらえば、安心して、絵を描いたり、自分でやりたいことを見つけて遊びだした。ある日、母親にしてみれば、付き添う日がいままで続くのか、早く切り上げたいという思いもあっただろうし、その日は拠所ない用事もあったようである。「お母さんは幼稚園では遊べないの」と玄闕まで追いつがるA子を置いて、母親は玄闕の外に出ってしまった。私は他の子どもの受け入れに追われていて、A子が玄闕まで母親を追っていったことに気が付いていなかった。火が付いたような泣き声が玄闕から聞こえてきて、私は事の展開を察し、A子を抱き上げなだめようとした。A子は、厳しく私の腕の中で抵抗して泣き叫び、体をのけぞらし暴れた。「お母さんを探す、探す」と言つて、玄闕の外を指さす。子どもの気持に添う関わりを心がけているとはいえ、玄闕の外に出るわけにはいか



ない。ごまかして「お母さんを探しに行こう」と保育室に戻ろうとすると、「あっち、あっち」と玄関を指差し、さらに大声で泣く。保育室にいる他の子どもものことも気になり、泣き叫び暴れるA子を抱きかかえながら保育室に戻る。

私と一緒にではなくては園庭に出られないB夫が待っていたこともあり、外に連れ出せば、A子も気分が変わって落ち着くかもしれないと考え、「お母さんをお庭から探そう」と言って、庭に出ようとする。そんなごまかしはA子には通用せず、あくまでも母親が出ていった玄関に続く廊下を指さして「あっち、あっち」と激しく泣き叫ぶ。ここまで激しく泣かせて連れ出すのはどうかと少しためらわれたが、どんなに泣き叫ぼうが、A子をしっかりと抱いて一瞬たりともA子と離れずに過ごそうと心に決めた。

待っていたB夫とともに山（園庭の築山）に向って移動しだしても、A子は相変わらず激しく泣いている。B夫が山に登る道に落ちている小さい緑の実をふと見つける。私がポケットから袋を出してB夫に渡すと、「あつた、あつた」といくつも見つけて自分の袋に入れる。A子は私の腕の中で相変わらず泣いていた。私が姿勢を低くして、階段状に山へと続く土留めの木の一つに座りこむと、近距離でB夫の様子が見えるようになり、小さい緑の実を拾うB夫の様子を見入るうちに、いつのまにかA子は泣き止んでいた。A子にもビニール袋を渡して、私が一つ拾って入れてみた。そして「Aちゃんも拾ってみたら」と





誘って、下に降ろそうとしても、降りようとしなない。すると、B夫が、A子の袋の中に自分が拾ったものをすっと入れてくれる。C子も山から下りてきて、「何をしているの?」と寄ってきてくれる。C子はちゃっかりどこで手に入れたのか、年長組用の外用ままごとのフライパンやスプーンなどをもって、お山の草や葉を「シチュー、つくっているの」と、せつせと混ぜたりしている。私がいくつか実を拾ってC子のフライパンに入れる。A子は、私に抱かれたまま、「あつた、あつた」と緑の実を指差すので、私は拾って、A子の袋に入れたり、B夫の袋に入れたり、C子のフライパンの中に入れたりしていた。すると、B夫、C子も見つけると自分のものにしたたり、それだけでなく、A子の袋の中にも入れてくれた。A子の袋の中にはいくつも緑の実が集まり、もうそろそろ降ろしても大丈夫かと考え、さりげなく何も言わずに降ろすと、A子は私の腕を離れ、すっと自分の足で立ち、B夫たちと実を拾い出した。

B夫やC子は、誰に言われたからでもなく、泣いていたA子の気持を受け止め、すっとA子の袋の中に実をいれてくれた。そのことが、どれだけA子を支えてくれたか計り知れない。自分も不安な気持を抱えていたB夫は、袋の中に少しずつ実を増やしていくことで、自分自身を一生懸命元気づけていたのであろう。B夫は、自分の気持と重ね合わせ、A子のために自分のできることを感覚的、直観的に感じ取って、素直にその行為をしてくれたのである。子どもたちは、このように、頭での理解ではなく、相手の今とつながるような行為をさりげなく担ってくれることがある。それが、人と人をつなげていく上で



大人の思惑を超え、大きな力になることをこの事例は教えてくれている。

D夫は、泣いている友だちがいると、すつと近づいてきて、自分のハンカチを出して、友だちの涙を



拭いてくれる。その行為を通して、泣いている友だちの心とつながろうとしている。「どうしたの?」とか、「泣かないのよ」とか、言葉で働きかけられるよりも、行為を通して働きかけられると、子どもたちはその行為を素直に受け止めて、働きかけてくれた人となりが持てるのである。子どもたちのふとした行為を通してつながり合う姿は、保育者である自分の関わりを見つめ直す機会をもたらししてくれる。言葉に頼りすぎずに、行為を通して、人と人がつながるといふことを、実践していけたらと思う。

狭い場所に共に入りこむ

五月も中旬になり、子どもたち同士、「いっしょ」ということを少しずつ楽しみ始めてきていた。E子、F子、G子が教卓の下にもぐりこんで、「もつと暗くして」と私に要求してくる。そこで、布地を取り出し、教卓の周りをカーテンのようにして覆ってみる。すると、その場所に惹かれて、H子、I子、J子も「入れて」と近づいてくる。E子は「だめよ」と即座に返すが、F子が「いいよ」と答えたので、E子もつられて「いいよ」と言い直す。J子は、机の下がもう満員で、机からはみ出した状態であったが、文句も言わず



に、入れてもらったことを受け入れて、はみ出しながらもどうか布地の中に入りこんでいる。E子は一度一緒に中に入ってみるが、中に入ることはこだわらず、五人がぎゅうぎゅうになって入っているため、すぐに外れてしまう布地を直す役回りを買って出た。E子がその後、ままごと道具をいくつか運びいれて、そのままごと道具をめくって、E子とJ子が取り合いになった。J子の思いは達せられず、J子が泣き出すことになったが、泣きながらも、J子はその場所を離れなかった。

狭い、周りから閉ざされた空間に身をおき、ひしめき合いながら、至近距離で身を寄せ合う体験は、日常の人との距離感と違って、一体感という密なつながりを子どもたちにもたらしにくれたのだと思う。日常の距離感では、自分がどうしても先に出てしまうE子、J子も一度はものの取り合いをしたものの、それ以外の時は、譲り合って一緒に過ごす人とながるということを体感していたのだと思う。

一枚のじょうがつなぐ

G子は、入園して一ヶ月くらい、自分で選んだ本を朝私に読んでもらうことから、幼稚園の生活を始めることが多かった。本を読んでもらうと安心して、自分なりに次の活動をみつけていった。G子以外にも、私に本を読んでもらうことで安心する子どもは他にもいて、時間を見つけてはそれぞれの要求に答えるようにしてきた。誰かに対して、本を読み出すと、いつのまにか子どもたちが集まってきて、押し合いへし合いになりながら本を見



ること、つながり合うことはよくあることであつた。

G子はその日、どういう訳かあまりいつもは選ばない電車の本を手にしてた。それは、K夫が大好

きな電車の本であつた。K夫は鉄砲弾のような子どもで、朝来るとすぐ外に出て、面白いもの、ことを見つけると猪突猛進して即実行というように、幼稚園中に出没してとにかく色々のことを見て毎日精力的に過ごしていた。ほとんど自分の保育室には寄り付かず、お帰り前ぎりぎりに保育室に連れ戻されてくるのが、その頃の日常であつた。その日はめずらしく朝少しの間保育室にいて、自分の好きな本を手をしているG子を見つけ、「Kちゃんの本、Kちゃんの本」と言つて、無理矢理G子からその本を奪い取ろうとした。G子も人が持っているとは何でも「G子も」と、所有には人並み以上の執着があるため、相手がK夫であつても、そう簡単には手放さない。その時は実習生がクラスに入つていて、お互い譲らずキーキー泣き叫び合つている二人を前に、思案に暮れ、動きがとまっていた。そこで、私がごぞを手にして、「ここで読んでもらつたら」と園庭の入り口近くのたたきにごぞを敷いた。二人はすつと泣き止んでごぞに座つた。そして、実習生にその本を読んでもらつて、二人とも満足して、それぞれ次の活動に移つていった。

それぞれ本を読んでもらいたいという気持でいたのに、それが本の取り合いになり、ものの所有の方に気持が移つてしまつてた。ごぞを敷いて読んでもらつた場所を明らかにし





たことは、本来の本を読んでもらうということに気持の流れを修整することにつながった。それは、ござというものが、複数の人が一緒に座れるもので、そこに座れば自分の居場所が確保され、読んでもらいたい本を読んでもらえるということが、子どもの中にもすっと思い描けたからであろう。G子も、K夫も、魔法のように、ものを取り合う人から、一緒に見る人に変身して、二人はつながり合った。

我が園には、庭用ござと室内用ござが複数用意されている。ござの持つ人と人をつなぐ魔力は、他の場でも遺憾無く發揮されている。お山にピクニックに出かける時も持つて行く。そして、その時の気分で適当な場所に敷くと、そこが基点になって、ごちそう作り、山登り、アスレチックなど、それぞれの活動をしながら子どもたちがつながっていく。部屋でも、二つのついたての間にかければ、屋根付きの少し閉じた空間になり、たちまち、おうちごっこやお化け屋敷ごっこが始まる。人と人をつなぐものということをもっと意識して、保育の場でいかしていきたいと思う。

今回は、行為、空間、ものということから、人と人がつながるということを考えてみた。ものをあげだしたら、次々書きたいことも出てきたが、今回はこのぐらいいして、さらに実践を通して、行為を通してながら考えを深めていきたいと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)